

ザ・ボイスメール 2010年12月号

### 「ハムレット」の舞台を訪ねて

さて、話はデンマークに戻り、最初に列車内で助けてくれた紳士との出会いの続きです。切符問題を機に話が弾んだついでに私は「これから『ハムレット』の舞台となったお城を見に行くんですよ」と言いました。すると彼からは思ってもみなかった発言が出てきました。

「それはスバラシイ。でも知ってるかい？実は『ハムレット』の作者はシェクスピアではないんだよ。デンマーク人の8割はシェクスピア作と信じてはいるけどね・・・」。

事前の資料収集のなかで、作者の真贋や著者がこのクロンボー城を実際に訪れたかどうかについて書かれているものもありましたが、まさかこんな「舞台」に向かう列車の中で同じような話を聞くとはいませんでした。

もう40年近くも前のことですが、朝日新聞で世界の文学作品の舞台を訪ねる「名作の旅」なる連載をしていました。その後、記事は上下2冊の本にまとめられました。私はその古い本を地元の図書館から借りてきて『ハムレット』の項を再読してみました。そこでは当時の名記者・白井健策氏も「やっぱりシェクスピアは城には来ていなかった」と結論づけ、それでもシェクスピアが新しい一つの世界を作り出した腕に驚嘆を表明しています。

まずは何よりも自分の目で確認してみることだ！ 私はヘルシンゴー駅から10分あまり歩くと、バルト海の岸辺にそびえるクロンボー城（別名エルシノア城）に着きました。入口付近にはデンマークの国旗が高く風になびいています。城はちょうど片仮名の口の字の形をして、真ん中は中庭になっています。その石畳を舞台に、夏には野外劇『ハムレット』が上演されてきているといえます。

私はまずハムレットが父王の亡霊を見たという塔の上に立ってみました。小説では寒く、暗く、不気味な荒々しい冬の城のイメージで描かれていますが、ラッキーというべきか、アンラッキーというべきでしょうか、初夏のスカンジナビアの空はあまりにも青く澄み、吹き抜けていく風も心地よい。のどかにカモメも飛んでいます。紺青の海を挟んですぐ向こうにはスウェーデンが見えました。

私は物語のイメージを保とうと、塔から降りると城の中の展示室から教会へ、さらに薄暗い地下壕まで歩を運びました。だが、自分一人での城内探索では、ハムレットと母親・王妃との会話はどこの部屋でなされたのか、ポローニアスの刺された事件現場はどこのか等はわかりません。そこで入場料を払った受付に再び戻ると、その日の責任者らしい男性に聞いてみました。すると、両手を広げジェスチャー豊かに話す氏からは予期もしなかった言葉が返ってきたのです。

「Nobody knows! (誰もわかりませんよ)」。氏の話しっぷりからは「そんなこと言ったって、そりゃ無理ってもんだぜ！」といった少々くだけた訳が合うでしょう。

なんとも“名言”です。だって架空の話の舞台がどこかはわかるはずはないからです。それでも、これまで書かれてきた訪問記のなかには、案内嬢が「ここがオフィーリアとハ

ムレットが言葉を交わした場所でありまして・・・」と説明された、なんて記述もあります。観光地としてはそこまでサービスしないと訪問客の期待に応えられないからなのでしょう。

昨年訪れたイタリアのベローナでも同様でした。『ロミオとジュリエット』が世界的に知られるようになってから、物語や映画に合わせるように舞台となった家や、ジュリエットが恋心に燃えた胸の内をささやいたというベランダが作られた、という説明を聞きました。物語が、あるいは映画が売れてその舞台が観光地化するのほどこにでもある流れです。それはそれで人々に想像の空間と夢を与えてよいことでしょう。

そんなことよりも、大事なのは悲劇『ハムレット』が世に送り出したメッセージです。広く知られているように、物語は、父を殺し母を奪い王位を剥奪した叔父を討つデンマーク王子・ハムレットの復讐劇。私は現場に来る前に、ほぼ50年ぶりに再読してみましたが、作品はやはり深く重いものでした。人生の真実を追究する、胸に刺さるような言葉が随所にあります。そんな印象に残る表現のいくつかを物語の流れに沿って挙げてみますと：

(以下は<集英社版全集>から。後で参照しやすいようにページ数まで書いていますが、朗読の際には略してください)

p 123 (ハムレット) ああ、汚れに汚れたこんな肉体なんて、溶けて流れて一滴の露になってしまうがいい。せめて永遠の神のきびしい掟さえなかったら自殺という手段が選べるのに・・・

p 127 (ポローニアス) 金は借りても貸してもいかん、貸すと友情まで焦げつくことが多いし、借り慣れると儉約の決意が鈍る。

p 151 (ハムレット) 生きるのか、生きないのか、問題はそこだ。どちらが気高い態度だろう？ 理不尽な運命のむごい仕打ちを心ひとつに耐え忍ぶか、それともあえて武器をとって苦難の嵐にたちむかい、力まかせにねじふせるか。死ぬ、そして眠る——それだけのことだ。

p 153 (ハムレット) <狂乱状態で帰ってきて>結婚するなら持参金代わりに呪いの言葉をくれてやるぞ——たとえ君(オフィーリア)が氷のように清純で雪のように潔白でも、世間の中傷はまぬかれぬ。尼寺へ行け、行くんだぞ、さようなら・・・

p 176 (王) 悲しみは決してひとりで攻めてこない、群れをなして押し寄せる。まず、父親を殺され、つづいてハムレットまでいなくなった。しかも殺人を犯して自業自得、やむをえぬ外国行きだ。ポローニアスの死をめぐるあらぬ噂や憶測がみだれとび、泥沼を掘り返したような始末。

p 189 (ハムレット) 土に還るとわれわれもどこまで落ちぶれるかわからんぞ、ホレイシヨ！アレクサンダーの尊い遺骸がいつのまにか酒樽の栓になっていないものでもなし。

シェクスピアはデンマーク国民史をもとに『ハムレット』を書き、このクロンボー城の名を不朽にとどめました。4大悲劇の中でも最も知られた作品であり、その主人公の性格

や発した言葉の解釈については、長い文学史のなかで、最も論議された、最も魅力的な人物の一人です。

とりわけ人口に膾炙している言葉は、”**To be or not to be, that is the question!**”でしょう。

上記の引用訳のほかにも様々に訳されていますが、最も受け入れられている訳は、「生きるべきか、死ぬべきか（あるいは、「生か、死か」）それが問題だ」でしょう。中世の英語を翻訳できるような力は私にはとてもありませんが、それでも再度、作品に目を通し、舞台の現場を訪れた自分としてはこの部分を次のように訳してみたいと思います。

「何が真実なのか、何が嘘なのか、それを究めるのが最重要課題である」。これは、人間対人間の葛藤の中で、正義と真実を求めて懊悩するハムレットの生命からの叫びなのです。そしてこの重い言葉は、今を生きる私たちにも、人生のあるべき生き方とは何なのか、本当の正義とは何なのか、根本的な問いを投げかけているような気がするのです。